

『小約翰』（魯迅訳、望・藹覃著）に関する覚え書（下）

关于《小约翰》（鲁迅译，望・藹覃著）的札记（下）

中井政喜
Masaki NAKAI

1. はじめに
2. 『小約翰』について（以上、前号）
3. 魯迅の『小約翰』翻訳について（以下、今号）
4. さいごに

3. 魯迅の『小約翰』翻訳について

3.1 出会いの発端の魅力

前出の『小約翰』の「引言」（1927・5・30）に魯迅は次のように言う。「たまたまその中に載せられた『小さなヨハネス』訳本の見本を見た。それは本書の第5章であり、非常に惹きつけられた。」（6頁）『小約翰』の第5章を見た時期は、1906年、魯迅が25歳ころであり、児童の時代からそれほどへだたっていないような、まさしく「赤子の心を失っていない」（「引言」という心情を原形に近く留めた時期であったと思われる。

魯迅はまた「引言」で次のように言う。

「これはまことに原序に言うように、〈象徴的写実的な童話詩〉である。無韻の詩、大人の童話である。作者の博識と鋭敏さによって、或いは一般の大人の童話を越えているのだろう。そのなかで例えば、コガネムシの一生、キノ

コ類の言動、蛍の理想、蟻の平和論は、いずれも実際と幻想の混合である。もしもあまり生物界の現象に心をとめていないのなら、このために若干の興味を減らすかもしれない、と私はすこし心配する。しかし私は愛する人もいると予感する、ただ赤子の心を失ってはず、『人間性と彼らの悲痛のある大都市』の人々がどこかにいると感ずるのでさえあれば。」(「引言」、6頁)¹

『小約翰』の翻訳草稿を作成してから約1ヶ月後、魯迅は随筆「從百草園到三味書屋〔百草園から三味書屋へ〕」(1926・9・18、『朝花夕拾』所収)を執筆する。それは、北京から廈門に移ったのちに書いた魯迅の思い出の記で、幼年時代に紹興の家の裏庭で虫や鳥と遊び、草の実を取って食べた記憶をつづる。その後、魯迅は私塾「三味書屋」に行き勉強しなければならなくなり、百草園で以前のように遊ぶことができなくなった。「Ade〔さようなら〕、私の蟋蟀たちよ！ Ade、私のキイチゴたち、オオイタビたちよ！……」(「從百草園到三味書屋」)

「從百草園到三味書屋」の文章によれば、児童時代の魯迅は、その年齢と成長によって赤子の心をもって百草園にのみ遊ぶことができなくなり、三味書屋という私塾において読書人としての知識・生き方を学ばなければならなかったことが分かる。

また、1926年9月、魯迅は45歳のころ、なお赤子の心を失っていなかったことも分かる。同時に、「從百草園到三味書屋」のなかで「Ade」(さようなら)というドイツ語を使用していることから、またその執筆が、ドイツ語版からの『小約翰』の翻訳草稿を8月13日に作成し終わって、ほぼ一ヶ月後という時期であることから考えて、『小約翰』の影響をうかがうことができる。²「他人が自分の食べることを好むものを私に食べるように勧めることは、私も望んでいないが、しかし私が食べることを好むものは、しばしば無自覚に人に食べることを勧める。読むものも同じであり、『小約翰』はその一つであって、自分が読むことを好み、また他人も読むことを願う本である。そのため知らず識らずに、ついに中国語に訳す考えをもった。この考えが出たのは、おそらく早かった、なぜなら私は長い間、作者と読者に大きな負債をもっているかのように思っていたからである。」(「引言」、7頁)

恐らく、『小約翰』の魅力は、³1906年以來、第一に主として、「赤子の心を失っていない」という魯迅の心情に基づいていたのだと思われる。

3.2 「赤子の心」について

魯迅は『『狹的籠』 記者附記』（1921・8・16、『訳文序跋集』所収）でソ連の盲目詩人エロシェンコについて次のように言う。

「日英は同盟国で、兄弟のようなよしみであり、〔エロシェンコが〕英国によって追放されたからには、自然と必ず日本からも追放されるのである。しかし今回は汚いのしりと殴打が加わった。殴られたすべての人々がしばしば物や鮮血を残すように、エロシェンコも物を残した。それが彼の創作集であり、一つは『夜明け前の歌』で、二つ目が『最後の溜息』である。

現在すでに出版したのは第1番目で、あわせて14篇、彼が他郷に寄寓するなかで日本人に読ませるためにつくった童話体の著作である。全体を通覧すると、彼は政治経済に興味がなく、また決して何らかの危険思想の気配をもっているのでもない。彼はただ幼稚な、しかし美しい純潔な心をもっているだけであり、世の中の境界も彼の夢幻を制限することができない。だから日本に対しても自分の身に受けたかのような非常に憤激した言葉を発する。彼のこうしたロシア式の広野のような精神は、日本ではあわないもので、当然殴打の返礼を受けなければならない。しかし彼の思ってもみないことに、このことは、彼が幼稚な、しかし純潔な心のみをもっていることを示している。私は巻を閉じたあと、人類の中にこのような赤子の心を失っていない人と著作があることに深く感謝した。」

また、『『魚的悲哀』 記者附記』（1921・11・10、『訳文序跋集』所収）で次のように言う。

「私見によれば、この篇におけるあらゆるものに対する同情は、オランダ人エーデン（F. Van. Eeden）の『小約翰』（Der Kleine Johannes）とかなり類似していると思う。『別のものが捕らえられて殺されることを見るのは、私にあっては、自分が殺されることよりもいっそう苦しい』については、私たちがロシアの作家の作品においてよく出会うことであり、あちらの偉大な精神であ

る。」

魯迅は、1925年5月30日付け許広平宛て書簡（『魯迅景宋通信集』二四）、『魯迅景宋通信集 《兩地書》的原信』〈湖南人民出版社、1984・6〉所収）で、1925年ころまでの自らの思想をいわば総括的に簡潔な形で表現した。

「実際のところ、私の考えは元々分かりにくいのです。というのもその中にはもとから多くの矛盾があるからです。私をして言わしむれば、〈人道主義〉と〈個人的無治主義〉という二つの思想の起伏消長であるのかも知れません。ですから私は突然人々を愛し、突然人々を憎みます。仕事をする場合、ときには確かに他人のためですが、ときには自分のなぐさめのためで、ときには生命のすみやかに消滅することを願うがゆえに、わざと命をかけてやるのです。」（『魯迅景宋通信集』二四）

1925年に言及される魯迅の思想の一側面である「人道主義」は、そのころ、決して楽天的楽観的なものではなく、陰影があり、⁴また人道主義という理想の高唱には批判的であったと思われる。⁵しかし魯迅の「人道主義」の基礎には、人類の中に「赤子の心」（あらゆるものに対する同情、「幼稚な、しかし純潔な心」、そして他人の悲痛を自分の悲痛として感ずる同情心）の存在を信ずる気持ちがあり、「赤子の心」が魯迅の「人道主義」の基礎的な心情の一つとなっていたと思われる。「赤子の心」は、エロシェンコの諸作品に現れ、ファン・エーデンの『小約翰』の小さなヨハネスに窺われるもので、魯迅が共感するものであった。

しかしヨハネスは、前述のように、その成熟の過程で、「赤子の心」をもちながらも、それを理解しながらも、決して「赤子の心を失っていない」という状態に留まるだけではなかった。例えば、ヨハネスは、妖精の世界の視点からする人類に対する批判にのみ留まるものではなかった。ヨハネスはしだいに現実の世界における人類の社会と生活に対する認識を深め、科学的認識を学び、人類の生と死の問題を認識していく。ヨハネスは冷酷な科学主義を避けて、人類を愛し、人類自身が生みだした人類の社会と生活における悲痛を感じて、それに参与し奮闘する人類の一員として、成熟していく道を少しずつ歩きはじめ、そして最後の場面でその道を選択することを決心したと思わ

れる。ヨハネスは自らこうした選択ができる地点にまで、選択の時点において、成熟していたと言える。

3.3 翻訳の動因の存在

魯迅は、前述のように、1925年の夏に『小約翰』の翻訳を果たそうとしたが、その年には北京女子師範大学における紛争が激しくなった。女師大学当局（校長）側と学生側の対立抗争において、魯迅は学生側に立って中心的に奮闘した。1925年に、学校当局側（北洋軍閥政府教育総長の章士釗^{しやうししやう}を中心として北洋軍閥政府の権力が後ろ盾となる）に立った「正人君子」や「学者」と、魯迅等の間で熾烈な論争が展開された。そのために、魯迅は多忙をきわめ、翻訳の時間がなくなったのだと思われる。⁶北京の学界をも巻き込んだ、革新勢力と守旧勢力による厳しい対立と抗争は、1925年末に女師大学生側の、革新勢力側の勝利となって収束した。

3.3.1 1925年夏、許広平等の説得

女師大事件の経過のなかで、1925年8月の段階においては、学生側・革新勢力の側が不利な状況に追いこまれつつあった。許広平は次のように語る。「事実における圧迫（参照『華蓋集』等）、暗黒を代表する章士釗たちの反動勢力、正人君子たちの卑劣な陥穽が、先生を痛憤させ病気にしてしまった。寢食をとらないうえに、長期間酒びたりとなっていた。医者は診察したあとでも、処方箋を書くことができず、まず禁煙禁酒することを彼に求めた。しかし先生を仔細に観察してみると、禁酒はまだ可能としても、禁煙はとてできないことではないようであった。当時彼の家に住みこんでいた或る同郷の人が私と相談し、一緒に彼に勧めに行った。まる一夜という繰り返し説き明かす時間を費やして、どうやらやっと考えが変わり、医者の話のとおり、しっかりと病気を治すことを承知した。」（『欣慰的紀念』、人民文学出版社、1951・7、「魯迅和青年們」）

「医者の警告は絶対たばこを吸ってはならない、さもなくば薬を飲んでも効き目はないというものであった。周囲の人々はみな驚き不安になった。或る

夏の夜、彼の同郷の人の知らせを得て、ただちに、私たちは彼の客間で、穏やかにお話した。余りにも自暴自棄になってはならないとお願いし、敵に対処するために、軽々しく自分を病気にさせ、敵を愉快がらせ、仕事を続けることができなくさせてはならないとお願いした。私たちの言葉はなんと粗雑であったことだろうか。しかし真摯な心によって、魯迅先生のいくばくかの許容を得ることができた。のち彼自身の認めるところによると、『野草』の中の〈臘葉^{ろうよう}〉は、摘みとられて『雁門集』の中に挟まれたまだらもよの楓の葉は、すなわち自らを譬えたものである。』（『關於魯迅的生活』、人民文学出版社、1954・6、「因校对『三十年集』而引起的話旧」）

許広平の思い出によると、魯迅は、女師大事件が不利に傾く中で疲労と憤りのために自暴自棄になっていたことが窺われる。そのような魯迅を許広平等が説得した「或る夏の夜」とは、1925年8月のことと思われる。⁷またこのことと関連して、こののち魯迅と許広平が気持ちを通いあわせた事情がある。1925年夏以降のあるときに、魯迅と許広平はお互いの気持ちを確かめあい、将来のことを話し合ったことが推測される。⁸1926年6月17日の季秉^{りへいちゅう}中宛て書簡（『魯迅全集』第11巻、前掲、2005年版）で魯迅は次のように述べる。「酒も飲みたいとは思うのです。しかしできません。というのも私は近頃急にまだ生き続けたいと思うようになったからです。なぜでしょうか。お話すれば少しおかしなことかも知れません。一、この世に私の生き続けていくことを希望する何人かが、まだいるからです。二、自分でもなお議論を起こしたいし、文学に関する本を印刷したいのです。」

このように、1925年夏における許広平等の説得は、自暴自棄から魯迅が立ち直るのに大きな作用を果たし、そののち魯迅に「生き続けたい」と思わせるようになる状況が出現した。それゆえにこそ、魯迅にとって生と死の問題がより切実になったと思われる。

また、1927年はじめに、『魯迅景宋通信集』一二四（1927・1・11、前掲）で、魯迅は自分の生存権を正当に評価し、許広平を愛してもよいのだとしている。

「私は十分犠牲となりました。私の以前の生活は、すべて犠牲としました、し

かし受ける者はまだ不足で、全生命を捧げなければならないのです。私は今や承知しません、私は〈敵〉を愛します、私は彼らに反抗します。

これはあなたが御承知のことです。私はこの三四年來、どのように学生のため、青年のため一生懸命となり、いささかの悪意もなく、与えることができさえすれば与えました。しかし男の方は、互いに嫉妬し、争いを始めました。一方が不満に思って、私を打ち殺そうとし、他方にも利益をなくさせようとしたのです。女子学生が坐っているのを見れば、彼らは噂を流します。こうした噂は、事実であるかないかにかかわらず、彼らは必ず作りだすものです、私が女性と会わないのでない限り。彼らは外観は新思想をよそおっていますが、実際はみな暴君酷吏、探偵、小人です。もしも彼らに気兼ねするならば、彼らは飽くことなく要求します。私は彼らを軽蔑するようになりました。私は時には自分を慚愧して、そのひとを愛する資格がないと心配しました。しかし彼らの言行思想を見れば、私も決して悪い人間ではない、私は愛してよいのだ、と思います。」（『魯迅景宋通信集』一二四、1927・1・11、前掲）

青年文学者（高長虹等）の卑劣さを見きわめ、青年文学者、周作人夫妻に対する献身者としての復讐感を、1926年末ごろから爆発させることをとおして、魯迅は自己の価値に対する、自己の生存権に対する正当な肯定へ、さらには許広平に対する愛情の肯定へと進むことができた。

そしてその後、広州で、魯迅と許広平は身近で生活をし、上海では共同生活をする。そのことからすれば、1925年夏ころ以降、魯迅は、自分の生命と人生の在り方について、いっそう深く、慎重に考えることになったと思われる。

3.3.2 三・一八惨案（虐殺事件）

1925年末に女師大事件が守旧派の敗北で収束したのち、北洋軍閥政府は、1926年3月18日、三・一八惨案（虐殺事件）を引き起こした。執政府の警備兵は、徒手空拳の請願デモ隊に発砲し、暴行を加えて弾圧し、死傷者200数名を出した。北京女子師範大学の学生劉和珍、楊徳群（二人は魯迅の学生で

あった)等も犠牲となり、魯迅は深い憤激と悲痛に陥った。「女師大風潮和三・一八惨案」(許羨蘇^{きよせんそ}、「回憶魯迅先生」、1961・6・30)は、⁹3月18日ころの魯迅の様子を次のように語る。

「その日の午後、私は訃報を魯迅先生に報告した。彼は非常に怒った。夜、私は学校に戻り、劉和珍と楊徳群のために通夜をし、講堂のすぐ近くの私の宿舎に泊まった。数日後、私が西三条へ老太太(魯迅の母)に会いに行くと、彼女は、魯迅先生が劉和珍と楊徳群の死んだあと、何日もご飯も食べず、話もしない、しかもとうとう病気でふせてしまった、そのうえ医者に診てもらおうともしない、と言った。私は山本医師に来てもらうように頼みにいくと言った。山本医師は八道湾でいつも来てもらうかかりつけの医者だったが、しかし西三条はまだ来てもらったことがなかった。魯迅先生は、私が彼に家に来てもらうように頼もうとしていることを知り、自分で行った方がいいと言い、こうしてやっと病気を診てもらった。」

また、魯迅の深い哀悼の気持ちは、「記念劉和珍君」(1926・4・1、『華蓋集統編』所収)等にうかがうことができる。

三・一八惨案以後、北洋軍閥政府はひそかに李大釗^{りだいしやう}等5名の逮捕令を出し、また50名(一説には48名)¹⁰のブラックリストをつくり、秘かに軍警に逮捕令を出したことが伝えられた。魯迅は、このブラックリストに載ったために、¹¹3月26日から避難して身を隠し、その後5月2日に避難生活を終えて帰宅した。

魯迅は、3月26日、先ず北京の西城の莽原社に避難した。探偵と疑われる三、四人の青年が訪れたため、3月29日、山本医院に移った。4月15日、馮玉祥の国民軍が北京から撤退したため、友人の齊宗頤と許寿裳の援助で、山本医院から、東交民巷^{とうこうみんこう}〔当時、外国の大使館等があった区域〕の德国医院〔ドイツ病院〕に移る。4月26日、德国医院から法国医院〔フランス病院〕に移る。そして5月2日に、魯迅は避難生活を終え、法国医院から家に帰った。

許寿裳は「三一八惨案」(『亡友魯迅印象記』、人民文学出版社、1953・6)において、ともに避難した德国医院での状況を次のように述べる。

「D医院で、壊れた古い道具が積み上げられた一部屋が、私や魯迅、そのほか

の知り合い十数名が集まり暮らした場所であった。夜にはセメントの地面に寝て、昼はパンと缶詰の食品で餓えをしのいだ。私は10日ほど泊まり、病室に移った。（中略）魯迅もまたそのようであった。」

こうした死の危険に直面した北京の状況における心情は、魯迅が廈門に移ったのちの手紙等の中に、一部窺うことができる。魯迅は、1926年8月26日に許広平とともに北京を離れ、廈門大学に赴任した（許広平は途中で魯迅と別れ、任地の広州に向かった）。

『魯迅景宋通信集』六四（1926・10・15、前掲）で魯迅は次のように言う。

「実際私はこの地〔廈門〕で、或るグループの人が大変な名士と見なしていません。北京での心の中びくびくしたときと比較すると、ずいぶん平穏です。」

また、許広平は『魯迅景宋通信集』五六（1926・9・30、『魯迅景宋通信集』、前掲）で北京の暗黒に触れ、次のように言う。

「学校〔広東省立女子師範学校〕は散漫で基金がなく、学生は少なく、様々のことが不備で、そうしたところでは当然関心が薄れます。しかし北京の暗黒は、当分のあいだ光明となることは難しく、北伐軍が北京まで行くか、或いは国民軍が再び入城するかしらないかぎり、私たちこの道の人間は、これを避けるのが吉です。このように考えると、いま私たちがいるところは、桃源郷に避難したものとと言えます。」

上の書信は、魯迅が廈門に赴任したのちに、二人が北京の暗黒の状況をふり返って触れたものである。

三・一八惨案後、犠牲となった女師大学生劉和珍等に対する悲痛は、魯迅に深い憤激と哀悼の気持ちをもたせたと思われる。また、北洋軍閥政府の逮捕令のために、魯迅はほぼ5週間にわたる避難生活をし、死の危険と直面していた。こうした体験が、生き続けたいと思うようになった魯迅に、改めて自分の生と死の問題、生きる道を考えさせたと思われる。

その後、魯迅は『小約翰』を1926年7月6日から翻訳しはじめ、8月13日に終了した。この『小約翰』の翻訳草稿の作成作業には、女師大学生劉和珍等が「人間性と彼らの悲痛のあるところ」、大きくて暗い都市（北京）におい

て、犠牲となったことに対する魯迅の憤激と悲痛、鎮魂の気持ちがこめられていた、と推測する。

すなわちこの時の、『小約翰』翻訳草稿の着手と終了への強い動因は、(1) 主として劉和珍等の犠牲者に対する魯迅の鎮魂の心情と悲憤、そして自らの生命の危機を深刻に体験し、生と死をめぐる問題を切実に考えたことにある、と推測する。さらに、上述のように、(2) 許広平等の説得と要望との関連で、「生き続けたい」と思う気持ちが強くなったことが、問題をいっそう切実にしたと思われる。

また、(3) 北京を離れば、ドイツ語訳本から『小約翰』を翻訳することにおいて、魯迅は良き協力者齊宗頤から離れ、彼の協力を得ることが難しくなることが予想された。このことも、この時の翻訳草稿作成の着手と終了の一つの理由としてあげなければならない。

おそらく、こうした三つの要因が存在し作用して、この時期の魯迅を翻訳草稿作成に突き動かす動因となったと思われる。

しかしなぜ、その後、翻訳草稿の完成と出版のための整理は、1927年5月に待たなければならなかったのだろうか。

3.3.3 厦門への赴任の目的

1926年8月26日に、魯迅は厦門大学（国文系教授兼国学院研究教授）に赴任のため北京を離れた。このとき、魯迅の赴任には『古小説鈞沈』等の書籍を厦門大学の資金で出版する希望もあった。¹²しかし同時に、厦門に移ることを一時の休養と位置づけ、次の活動のための準備とする気持ちがあった。魯迅は李秉中宛て書簡（1926年6月17日付け、前掲）で、北京を去ることについて、休みたいという気持ちのあることを述べている。

「現在まで、文章はやはり書いています。〈文章〉と言うより、〈ののしり〉と言ったほうがよいでしょう。しかし私は実際極度に疲労し、すこし休みたいと思い、今年秋、ほかのところへ行くかもしれません。場所はまだ決まっていません、おそらく南方です。目的は、一、もっぱら教授し、ほかのことに関わることを少なくします（しかしこれも分かりません、おそらく依然とし

て言わなければならないでしょう)。二、数文のお金を稼ぎ、家の生活費にあてます、印税によるのは結局十分ではありませんので。家族は動きません、自分一人で行きます。期間は少なければ1年、多ければ2年で、そのあと、私はやはりにぎやかなところに行き、例によって騒動を起こします。」

また魯迅は、廈門に来た本意を『魯迅景宋通信集』一一六（1926・12・29、前掲）で次のように言う。

「廈門大学は废物です、言うに足りません。もし中山大学にするべきことがあれば、私もこのために力を出したいと思います。しかしもちろん自分の身を損ねないことを限度とします。私が廈門に来たのは、本意はしばらく休養し、そしてすこし準備することでした。」

魯迅がここで言う「休養」とは、北京において青年文学者の育成のためにはらった献身的努力と、女師大事件における熾烈な闘争と論戦、また三・一八惨案以後に死の危険に直面した一時期の避難生活等々による、極度の疲労からの休養であったと思われる。

しかし魯迅は、廈門で孤独に陥った。また書籍の出版について廈門大学は積極的でなかったこともあり、あまりにも閑静で刺激の少ない廈門大学に見切りをつける。¹³魯迅は、1927年1月16日に廈門を離れ、中山大学に赴任するため、広州に向かった。魯迅は、国民革命の「策源地」広州についたのちの新たな活動を意図していた。¹⁴

ところで魯迅は、北京で1926年8月13日に『小約翰』の翻訳草稿の作成を終了し、9月4日に、それをもって廈門大学に到着した。そののち、以前の北京での生活に比べれば、魯迅は多少の時間の余裕が廈門大学においてできたと推測される。しかし廈門滞在の目的の本意に当面の「休養」を考えた魯迅の意図と、『小約翰』の物語の主題の意図（「人間性と彼らの悲痛のあるところ」へ向かい、そこに参与し奮闘することを選択する）とは、いささかそぐわないものがあったと想像される。すなわち悲痛にみちた大都市の北京から離れて当面の「休養」を求めた魯迅の気持ち、すなわち生と死の緊張した状況からしばらく遠ざかろうとした魯迅の気持ちと、ヨハネスの張りつめた選択、「人間性と彼らの悲痛のあるところ」、暗い大きな都市に向かい奮闘する

という心情とには、かけ離れた、逆方向のものがあつた。そのことが一因となり、厦門に滞在した時期において『小約翰』の翻訳草稿はそのままに置かれて、完成に向けて整理されなかつたと推測する。

3.3.4 四・一二反共クーデター

1927年1月、魯迅は厦門大学から広州の中山大学に転任し、再び積極的に文学活動と社会活動に奮闘しようとする。しかし同時にそこには、自分が戦士ではないという思いもあつた。広州で、国民革命の一翼を補佐する教育上の仕事を意志すると同時に、¹⁵「革命の策源地」に逃れてきたという意識もあつたと思われる。¹⁶

そのころ、国民革命の「策源地」広州における教育界の教員・学生の状況は、国民党の左派と右派の勢力が陰に日に衝突し、闘争している状況であつた。

魯迅は、上海に移つたのち、「鐘樓上——夜記之二」（『語絲』第4巻第1期、1927・12・17、『三閑集』所収）で次のようにふり返つて言う。

「私が初めて広州に着いた頃、時には確かに安定した気分を感じた。数年前北方では、いつも党人が圧迫されるのを目にし、青年が捕殺されるのを見たが、そこ〔広州〕に行くと、すべて目にするのがなくなつた。のちになつてこれは〈上からの命令を受けた革命〉の現象にすぎないことを悟つた。」

また魯迅は、「通信」（1928・4・10、『三閑集』所収）で次のように言う。「以上は私がまだ北京にいたときのことである、すなわち成仿吾^{せいほうこ}のいわゆる、〈真相を知らない立場におかれて〉小資産階級であつたときのことである。しかしやはり文章を書くことに慎重でなかつたため、ご飯の食いあげとなり、しかも逃げださなければならなくなつた。そのため〈無煙火薬〉が爆発するのを待たずに、転々として〈革命の策源地〉に逃げこんだ。数ヶ月暮らして、私は驚いた、以前聞いたところはすべてデマであつて、この所は、まさしく軍人と商人が支配する国であつた。」

魯迅は、「革命の策源地」の広州社会が基本的に旧社会の社会意識が改革されてない社会、上からの革命が行われた、軍人と商人が支配する社会であ

ると認識している。¹⁷北京の北洋軍閥政府支配下の学生たちの意識が鋭くとぎすまされたものであることに比べると、国民政府下の広東の学生運動は真剣さに鈍いものがあった。¹⁸

1927年3月、上海で労働者が蜂起し、軍閥を駆逐して上海を支配した。国民革命が進展すると見える中で、1927年4月、蒋介石は、四・一二反共クーデターを上海で行う（広州には、4月15日に波及する）。蒋介石と国民党右派は、上海において労働者をはじめ左翼勢力に対して徹底した弾圧と殺害を行い、800余名の左派人士が逮捕殺害され、そのほか行方不明者5,000余名におよんだ。4月18日、南京国民政府が樹立され、7月に武漢国民政府が崩壊して、国民革命は挫折する。

4月15日に波及した広東における反共クーデターで、殺害された左翼関係者は2,100余名、中山大学の学生も40余名逮捕された。魯迅は中山大学学生の逮捕に抗議し、全学の教務主任として逮捕学生の救出を諮ったが、しかし学校当局は拒否した。4月21日、魯迅は中山大学の一切の職務を辞し、¹⁹自宅に引きこもった。6月6日、魯迅の辞職が中山大学に認められた。こののち、魯迅は自宅に蟄居状態となり、また監視を受けることもあった。²⁰

『小約翰』の「引言」（1927・5・30）でも、魯迅は、広州という「沈黙の都市」における、この種の自分の生活に触れている。

「残念なことに、私の旧同僚の齊君〔齊宗頤〕は今どこに漫遊しているのかわからない。去年別れて以来、今まで消息が通じていず、難解なところがあっても、相談をしたり議論のしようがなくなっている。もしも誤訳があれば、その責は当然私が負う。そのうえ沈黙の都市ではあるけれども、ときには偵察の目、探る役目の手紙、北京式のデマがあって、耳目を騒がし、このために執筆がまたいつもぞんざいに流れた。」（「引言」、8頁）

また四・一二反共クーデターのあと、魯迅が生命の危険に直面していたことについて、「答有恒先生」（1927・9・4、『而已集』所収）で次のように述べている。

「しかし今回、私に最も僥倖なことは、結局共産党にされなかったことです。以前或る青年は、陳独秀が『新青年』を出し、私がそこで文章を書いたこと

があることによって、私が共産党であることを証明しようとした。しかし別の青年によってくつがえされました、彼はそのとき陳独秀さえもまだ共産主義を語っていなかったことを知っていました。一步退いて、〈親共産派〉にしても、結局成功しませんでした。もしも私が中山大学から出て、すぐに広州を離れたならば、私は、そこへ並べられることになっただろうと思います。しかし私は行きません、だから新聞で『逃げた』『漢口へ行った』と騒いだあと、むしろ大丈夫だったのです。」

四・一二反共クーデターについて、魯迅がどのような衝撃を受けたかについて、『回憶魯迅』(馮雪峰^{ふうせつぽう}、人民文学出版社、1952・8、第29頁、底本は『魯迅卷』第8編〈中国現代文学社編〉)は、1929年前半における魯迅の回顧の発言を次のように記す。

「『もしも、〈革命〉の広州でもあのような殺戮がありうることを予測できたか、と問う人がいるなら、私は率直に言う、まったく思いもよらなかった、と。私も〈美しい夢〉を抱いて広州に行ったことはしばらく言うまい。そこでは、まだ〈合作〉のときで、私はこの目でそうした顔つきを見たし、そうした誓いの言葉を聞いた。私が世故にたけていると言うのなら、あらゆる世故は役に立たないだろう。……まだあまりにもまじめで、〈芝居をする虚無党〔原文は、做戲的虚無党〕〉を信じすぎ、大きなペテンにかかってしまった……私はついに驚きのあまり呆然とした……血の代償によって、得た教訓はこのペテンを理解したことだけだ。』」

また、当時、魯迅を訪問した山上正義は、「魯迅を語る——北支那の白話文学運動——」(『新潮』第25巻第3号、1928・3)で次のように述べる。

「私は本年〔1927年〕夏、広東郊外白雲路の隠遁所に氏が漢魏叢書、唐宋詩文等の堆積の中に埋れ乍ら細いレクラム版の独逸ものの短篇を、毛筆で楷書を以ってコツコツとして翻訳されている姿を見たことがあった。」(100頁)

「三月〔1927年〕頃だった。広東に居る創造社系の作家評論家達が『世界の文学者に訴う』という宣言書を発表したことがあった。²¹日本の『文芸戦線』にも訳載された様だが、極めて平凡な、何の激烈な文句も、危険な意味も含まれていなかった。しかし四月十五日、李濟深〔李濟深の原名〕なる新軍閥

が一度その本性を明らかにして清党運動の名を籍ってクーデターを断行するや、此の『世界の文学者に訴う』の宣言書署名者連も余りに当然のことの如く、クーデターの対象とされた。（中略）

慰むる言葉も見出せず私とその潜匿の一民屋の二階に魯迅と相對していると、恰度其の窓から見える大通りを一隊の工会〔労働組合〕の糾察隊が工会旗、糾察隊旗をたて、喇叭を吹いて通って行った。

窓先きの電柱には清党の標語が無数に貼られてあった。『打倒武漢政府』『擁護南京政府』『国賊中国共産党』……等。そして其の新しいポスターの下には未だ数日前迄鮮かに貼られた『聯共容共是総理之遺囑』『打倒新軍閥蒋介石』等の全然反対な意味のものが、十分に剥き去られないで残ってさえ居た。

魯迅は工会糾察隊の通り過ぎるのを見て言った。『よくも恥しくもないものだ。昨日迄は共産主義万歳を叫んだものが、今日は共産主義系の工人を捜索して廻っています』そう言われていると、なるほどそれは右派の工会工人で公安局の手先きとして左派工人の逮捕捜索に従事している一隊であった。

魯迅の評語には唯冷い、暗い、絶望に近いものしか感ぜられなかった。」（101頁～102頁）²²

四・一二反共クーデター以後、約1ヶ月半ほどたった『小約翰』の「引言」（1927・5・30）で、逮捕され拷問されつつある、或いは殺害された中山大学学生たちの過酷な境遇について、²³魯迅は幸いに生きのこった人間として次のように触れている。

「オランダの海辺における砂の丘の風景は、本書の描写についてだけでも、憧れさせるのに十分である。私のこの樓外は異なる。満天の炎熱の日光、ときには縄の太さのようなスコールである。前の小さな港には十数隻の水上生活者の船があり、一舟が一家で、一家が一世界で、談笑と泣き喚き、大都市の悲歎をそなえている。あちらには青春の生命の滅亡があること、或いはまさに殺害され、或いはまさに呻吟し、或いはまさに〈腐乱の事業を経営し〉そしてこの事業の材料となっていることを、知らないと思うかのようでもある。しかし私はだんだんと知った、これは沈黙の都市の中であるけれども、なお

私の生命は存在しており、たとえすでに敗退を続けているとしても、自分が実際滅亡していないことを。だが〈火の雲〉は見え、時は陰雨に苦しみ、明るいようでもあり暗いようでもある。またこの訳稿を整理するときとなったようだ。そこで5月2日に着手し、いささか修正を加え、そして清書して、月末にやっと完成した。費やした時間はまた一ヶ月である。」(7頁)

『小約翰』の翻訳草稿の整理と完成は、上記のような状況の中で行われた。このとき整理と完成を促した動因は、第一に、逮捕され犠牲となった中山大学の左翼系の学生たち(畢磊等)に対する悲痛と哀悼の気持ち、鎮魂の気持ちであり、圧制者に対する反抗の気持ちであった。第二に、魯迅自らも生命の危機に直面し、その時点で幸いに生きのこった人間として、今後、「人間性と彼らの悲痛のあるところ」に向かい、奮闘し反抗することへの秘められた意志であったと思われる。

魯迅は、一舟が一家で、一家が一世界であるような、閉塞した状態から中国の人々が脱却できるように啓蒙していくことを望んだ。また魯迅は、現実の中国に存在する青春の生命の滅亡に向きあって生きていくこと、「腐乱の事業を経営」する南京国民政府に抵抗し反抗し、中国の改革のために生きていくことを意志した。こうした魯迅の意志がこの時期における『小約翰』の翻訳草稿の整理と完成に秘められていたと思われる。

魯迅は、三・一八惨案と、四・一二反共クーデターという、二つの惨案の時期において苛酷な体験をもった。このことが、それぞれ『小約翰』の翻訳を促し草稿を完成させ、また草稿の整理と出版準備を完成させる、主たる動因となった(上記以外のほかの動因もあったことは述べた)、と思われる。

4. さいごに

上述の議論を踏まえて、『小約翰』翻訳をめぐる、魯迅の主たる動因と意図について、小論の推測をまとめることにする。

4.1 翻訳の主たる動因について

小論は『小約翰』の主題を次のように捉える。それは、ヨハネスがその成熟の過程をへながら最後の場面の選択(人類への愛に基づく社会参与)を行

うところへと到達する物語である。そして成熟の過程には、生と死の課題が
つねに織りこまれつつ進行する。

小さなヨハネスは「赤子の心」をもちつつ、それを理解しながらも、しかし「赤子の心を失ってはず」という状態に留まらなかった。ヨハネスは、妖精の世界の視点からする人類に対する批判をもち、人類のために泣いた。しかし将知の導きのゆえにヨハネスは妖精の世界を失う。その後、ヨハネスは穿鑿に導かれ、数字博士の冷徹な科学的認識と解釈を学んだが、しかしその冷徹な科学的真理の追究と解釈に対して全面的に容認するものではなかった。ヨハネスは、人間性と彼らの悲痛のある、現実の人類の社会と生活に対する認識を深め、そして人類が直面する生と死の問題に対する認識を深めていった。ヨハネスは、最後の選択の場面で、人類を愛し、人間性と彼らの悲痛のある場所で奮闘する人類の一員として、人類の社会のなかで奮闘し成熟していくという道を選択した。ヨハネスは、「人間性と彼らの悲痛のあるところ」、暗い大きな都市に向かい、そこに参与し奮闘する道を選んだ。

では、この『小約翰』の翻訳に魯迅を推し進めた動因は何だったのだろうか。

(1) 晩年まで魯迅は、人道主義の一つの基礎的心情としての「赤子の心」を留めていたことが考えられる。²⁴それは魯迅が幼少年時代から持っていたもので、青年時代に『小約翰』と出会って以来、『小約翰』の魅力と、「赤子の心」に基づく共感のゆえに、魯迅は翻訳を促されてきたものと思われる。

(2) また、これとともに、『小約翰』に対する魯迅の高い評価の中には、『小約翰』の物語全体をとおして提起された諸問題に対する魯迅の共振（生と死の問題、数字博士の冷徹な科学的認識に対する懐疑等）、およびヨハネス自身の成熟の過程と最後の場面におけるヨハネスの選択に対する魯迅の共感²⁵があったと思われる。

(3) また、当時の状況との関わりから、魯迅の翻訳を推し進めた主たる動因について次のように言うことができる。

魯迅は、女師大事件の過程のなかで許広平等の説得を契機として、「生き続けたい」という願望をもつようになった。また1926年、三・一八惨案以

後、魯迅は教え子の女師大学生たちが北洋軍閥政府によって殺害されたことに対する悲憤を抱き、そして彼自らも死の危険と直面する体験をもった。こうした悲憤の気持ちを抱き、自らの生と死の問題に直面したことが、『小約翰』の翻訳に踏みきって翻訳草稿を作成する主要な動因の一つとなったと思われる。

また1927年四・一二反共クーデター以後、広州でも多くの左翼学生が逮捕され処刑された。魯迅は压制者に対する憤激と、犠牲者に対する深い哀悼と鎮魂の気持ちをもった。そして反共クーデターのなかで、魯迅自身が死の危険に直面して、なお再び生きのこる体験をもった。魯迅の憤激と犠牲者に対する鎮魂の気持ち、生と死に直面した心情、そしてなお生きのこったものとしての、中国改革のために社会参与する意志が、『小約翰』の翻訳草稿を整理し完成して出版するための主要な動因として作用した、と推測する。

しかし、1926年8月に北京で翻訳草稿の作成を終了したあと、魯迅は厦門大学に赴任して、その後多少の時間の余裕が生じたと推測される。このとき、なぜ魯迅は『小約翰』の翻訳草稿の整理をしなかったのだろうか。

おそらく、厦門滞在を当面の「休養」と考えた魯迅の本意と、『小約翰』の物語の主題の意図（生と死の選択を前にして、「人間性と彼らの悲痛のあるところ」に向かい奮闘することを選ぶ）とは、そぐわないものがあったと推測される。ヨハネスの生と死の緊張した選択、「人間性と彼らの悲痛のあるところ」、暗い大きな都市に向かい奮闘しようとする心情と、北京から離れて「休養」を一時求めた魯迅の気持ちとは、かけ離れた、逆方向の状態があったと想像される。そのことが一因となり、厦門滞在時期において『小約翰』の翻訳草稿はそのままに置かれ、完成に向けて整理されなかったと思われる。

1927年1月、魯迅は翻訳草稿をもって広州に到着し、中山大学に赴任した。広州は「革命の策源地」であり、国民革命のために、魯迅はその一翼、教育の分野を補佐することとなった。そうした「国民革命」に対する関与は、魯迅の厦門時期にもった「休養」を求める心理的な負い目と、そして相そぐわないという心理的障害をほぼ解消させたと思われる。

しかし魯迅は中山大学において、文学系主任と全学の教務主任を担当し、

膨大な業務に奔走せざるを得ず、多忙をきわめたため、『小約翰』の翻訳草稿の整理に対して実際に手が回らなくなる事情が生じたと思われる。²⁶

しかも間もなく、4月15日から広州に反共クーデターが波及し、李済深による左翼勢力に対する弾圧と殺害がはじまる。そしてそのほぼ1ヶ月半後、なお生きのこることのできた魯迅には、左翼の中山大学学生（親しかった畢磊等々）が多数逮捕され、中山大学の責任ある一教員として彼らを救うことができなかつた悲痛と圧制者に対する憤激があつた。また、魯迅自身も死の危険に直面することを体験したし、なおその地を離れるまで、死の危険に直面するであろう広州の状況があつた。

こうしたことが動因となり、魯迅は今後、自らの生命がなお存在することが可能であれば、「人間性と彼らの悲痛のあるところ」で奮闘と反抗を行わなければならないという意志をもって、そして鎮魂の気持をもって、5月から『小約翰』の翻訳草稿の整理と、出版の準備をはじめ、6月に完成させたと思われる。

上記の1927年の四・一二反共クーデターのこの体験には、1926年の三・一八惨案のとき、北京女師大学生等が犠牲となり非命をとげたことに対する悲痛と憤激、鎮魂と、魯迅自ら死の危機に直面した同じような体験が、二重写しとなっていたと思われる。

4.2 上海にて

1927年9月、魯迅は、一步間違えれば、すぐに死に直面せざるを得ない広州から離れた。魯迅は、同年10月から当面、上海の租界との境界あたりで、比較的自分の安全を確保できる場所で、「休養」を求めるのではなくて、人々の悲痛にみちた中国の社会と向きあい、中国改革のためになお奮闘を継続しようと意志した。それは、『小約翰』最後の場面におけるヨハネスの緊張した選択と同じ心情に属するものであつたと想像される。

魯迅は、同年10月3日に上海に着いて間もなく、11月に創造社からの提案を受け入れ、『創造週報』の復刊に対する協力を承諾した。これは結局、創造社側の事情で実現しなかつたことであつた。しかしここには、南京国民政府

の圧制に対して反抗し、中国旧社会の改革を目指して奮闘しようとする、魯迅の意志が窺われると思われる。

翌1928年1月、『小約翰』が未名社から出版された。

そしてその出版において推測される上記の中国改革の意志は、1936年9月、魯迅の死にいたるまで継続された意志であったと思われる。

注

¹ 魯迅の「引言」の原文は次のとおりである。

「這誠如序文所說，是一篇“象徵寫實底童話詩”。無韻的詩，成人的童話。因為作者的博識和敏感，或者竟已超過了一般成人的童話了。其中如金虫の生平，菌類の言行，火蜚の理想，螞蟻の平和論，都是實際和幻想的混合。我有些怕，倘不甚留心于生物界現象的，會因此減少若干興趣。但我豫覺也有人愛，只要不失赤子之心，而感到什麼地方有着“人性和他們的悲痛之所在的大都市”的人們。」(6頁)

この文章を、『魯迅全集』第12卷(学習研究社、1985・8・27)では次のように訳す。「これはまさに序文の説くとおり、一篇の『象徴と写実の童話詩』である。無韻の詩、大人の童話である。作者の博識と感受性の鋭敏さのために、ふつうの大人の童話をすでに超越しているかもしれない。なかでも黄金虫の暮らし、菌類の言行、蜚の理想、蟻の平和論、これらはすべて現実と幻想の融合である。生物界の現象にあまり関心を抱いていない人だと、これがために多少興味をそがれてしまわないかと、少し心配である。しかし私は、人の愛があり、赤子の心さえ失わずにいれば、いたるところに『人類とその苦悩が存在する大都会』の人々がいることを感じるであろうと予感しているのである。」(323頁、藤井省三訳)

とりわけこの下線の訳文に私は疑問をもつ。

² 「一個童話」(孫郁、『小約翰』(胡劍虹訳、華夏出版社、2004・5)所収、原載は『書摘』)は次のように指摘する。

「魯迅に対する《小約翰》の影響は、潜在的である。この本は、直接的には彼の《朝花夕拾》の産出を促した。あの『從百草園到三味書屋』は、すなわち《小約翰》を訳したあとでの自我追憶である、とさえ私は思う。その中のいくつかの名詞、イメージは、ファン・エーデンの小説とかなり近い、例えば勉強に対するうんざり感、草花・虫に対する愛着、そして不思議な伝説、等々。」

「魯迅翻譯文學的傳播和影響」(吳鈞、『魯迅翻譯研究』、齊魯書社、2009・1)は、『小約翰』と「從百草園到三味書屋」の庭園の描写等を比較し、次のように指摘する。

「『百草園』は物語の構造と語気、言葉の運用において『小約翰』の影響を受けている痕跡がある。とりわけ魯迅は、家人が幼い彼を私塾に入れようとし、百草園に別れを告げるとき次のように書いた。『私は百草園にいつも行くことはできなくなるであろう。Ade、私の蟋蟀たちよ！Ade、私のキイチゴたち、オオイタビたちよ！……』」(237頁)

³ 1927年、劉半農はノーベル文学賞の候補者として魯迅を推薦することを、台静農をつう

じて打診した。魯迅は1927年9月25日付け台静農宛て書簡（『魯迅全集』第12巻、2005年版）で、劉半農の依頼を受けた台静農に拒絶して答えた。そのなかでファン・エーデンの『小さなヨハネス』に対する高い評価を間接的に次のように述べた。

「ノーベル賞金について、梁啓超はもちろんふさわしくありませんし、私もふさわしくありません。このお金を獲得しようとするなら、まだ努力が足りません。世界で私と較べて良い作家は限りがなく、彼らは得ることができません。ほら、私が訳した『小約翰』は、私が作ることができるものでしょうか、しかしこの作者は獲得していないのです。」

⁴ 魯迅は、このころ、アルツイバーシェフの短篇小説「医生〔医者〕」（アルツイバーシェフ原著、魯迅訳、1921・4・28訳了、『小説月報』第12巻号外、『俄国文学研究』、1921・9、後に『現代小説訳叢』（上海商務印書館、1922・5）所収）を訳した。ロシアの文学者アルツイバーシェフは、ある歴史的社会的条件下における（帝制ロシアにおけるユダヤ人虐殺のポグロムの事件において）医者の人道主義的作用について、人道主義の適用される範囲に関する懐疑を物語っている。魯迅は、人道主義に関するアルツイバーシェフの懐疑に共感するところがあったと思われる。

⁵ 魯迅は、このころ、アルツイバーシェフの小説『工人綏恵略夫〔労働者シェヴィリヨフ〕』（アルツイバーシェフ原著、魯迅訳、1920・10・22訳了、上海商務印書館、1922・5）を訳した。その物語の中で魯迅は、人道主義者アラジェフの理想の高唱（人道主義の理想の高唱）に対するシェヴィリヨフの批判を知った、と思われる。

⁶ 前述のように、魯迅は1925年の夏に『小約翰』を訳そうと意図したが、しかし果たせなかった。このことに関連して、1925年はじめころから魯迅が女師大事件の闘争に直接参与したことが、翻訳の実行を意図する一つの動因となった可能性がある。

⁷ 拙稿「魯迅『孤独者』覚え書」（『名古屋大学中国語学文学論集』第3輯、1979・2、『魯迅探索』（汲古書院、2006・1・10）第六章にあたる、第六章の注23を参照されたい）は、許広平等による愛護にみちた説得の時期が1925年8月であったと推定した。

⁸ 『魯迅伝略』（朱正、人民文学出版社、1982・9）は、「この変化はいつ、どのように起こったものか、局外者には全く調査する方法がなく、必ずしも調査する必要もない。推測してみると、恐らく1925年7月30日以後の或る日であったろう、8月1日女師大闘争の激化の中であったかも知れない。二人は深く立ち入った話をする機会を持ち、今後適切な時期に共同生活を築くことに意見が一致したのであろう。」とし、1925年8月からほぼ1年1ヶ月間二人の間の書簡が絶えたという状況から、逆に上のような推定をしている。同様の指摘は、『『両地書』研究』（王得后、天津人民出版社、1982・9）にも見られる。

また、『魯迅景宋通信集』九二（1926・11・22、『魯迅景宋通信集』、前掲）で、許広平は将来の生活をめぐることについて次のように触れている。

「これは正当な解決のためにお話したことですが、もしもこの批評も過激だとおっしゃるなら、もちろん平素北京でお話ししていたとおりにします。」

⁹ 『魯迅研究資料』第3輯（文物出版社、1979・2、内部発行）所収。

¹⁰ 『魯迅年譜（増訂本）』全4巻（李何林主編、人民文学出版社、2000・9）による。

¹¹ 「大衍発微」（1928・10・20、『而已集』所収）

¹² 魯迅は、すでに関係する資料を集めて、『古小説鈞沈』、『漢画像考』の出版を考えていた。魯迅は厦門大学の資金で出版できることを望んだが、大学側は『古小説鈞沈』の原稿の

あることを知って以後、そのままとなったと言う。(『魯迅景宋通信集』八十九、1926・11・18)

- ¹³ 魯迅は、許寿裳宛て書簡(1926年10月4日付け)で廈門の生活を次のように言う。
「この間、授業はべつに多くありません、六時間だけです。二時間は教材を編集しなければなりません。しかし話すことのできる人がいなく、きわめて寂しいです。生活の費用を求めるために、苦勞して疲れました。北京ではもとより生活の費用がありませんでしたが、まだ生活がありました。今は生活の費用がありますが、生活を失い、ことにまた無聊であります。」

魯迅はまた、大学側が高い給料にものを言わせながら、教員の生活環境に配慮することの少ない姿勢に反発し(例えば、『魯迅景宋通信集』一一〇)、魯迅、1926・12・20、『魯迅景宋通信集』、前掲)、また大学で着々と党派を根づかせる現代評論派(顧頡剛を指す)を嫌い(例えば、『魯迅景宋通信集』七七)(魯迅、1926・11・3、『魯迅景宋通信集』、前掲)、自分を招聘してくれた林語堂の好意に感謝し配慮つつも(例えば、『魯迅景宋通信集』七六)(魯迅、1926・11・1、『魯迅景宋通信集』、前掲)、廈門大学を去り、許広平のいる広州に向かう。

- ¹⁴ 『魯迅景宋通信集』八〇(1926・11・7、『魯迅景宋通信集』、前掲)で魯迅は次のように言う。

「實際私にもまだ野心があり、広州に行ったあと、研究系(現代評論派を指す——中井注)に打撃を加えたいと思います。たかだか北京に行くことができなくなるだけで、気にしません。第二に、創造社と連絡をとり、戦線を作って、旧社会に侵攻し、私はさらに努めて文章を作ることも、気にかけてません。」

また、『魯迅景宋通信集』九五(1926・11・28、『魯迅景宋通信集』、前掲)で魯迅は次のように言う。

「この地〔廈門を指す——中井〕を離れたあと、私は農奴の生活を改めなければなりません。社会の方面のために、私は教育をするほか、これまでどおり継続して文芸運動をし、或いはさらに良い仕事をしたいと思います。」

- ¹⁵ 魯迅は『魯迅景宋通信集』一二(1925・4・14、前掲)で次のように言う。
「当時袁世凱と妥協して病根を植えつけましたが、実際はやはり党人の実力が充実していなかったからです。ですから前車の轍に鑑みて、こののち第一に重要な計画は、やはり実力の充実であり、このほかの言動は、ただすこし補佐することができるだけです。」

- ¹⁶ 魯迅は「通信」(1927・9・3、『而已集』所収)で次のようにふり返って述べる。
「私の中山大学に行った本当の気持ちは、もともと教師となることにすぎなかった。しかし幾人かの青年たちが盛大に歓迎会を開いてくれた。私は良くないと分かっていたので、最初の第1回目の演説で、自分は『戦士』とか『革命人』とかではないことを声明しました。もしもそうであるならば、北京や廈門で奮闘していなければならない。しかし私は『革命の後方』広州に身を隠しに来ている。これこそ全く『戦士』ではない証拠である、と。」

- ¹⁷ 魯迅は、「慶祝滬寧克復的那一辺」(1927・4・10、『集外集拾遺補編』所収)で次のように言う。国民革命の進展が順調である現在、革命をさらに進撃させなければならない。革命の進展を祝賀することは、革命とは関係がないとする。

「このような人〔革命を祝賀する人——中井注〕が多くなれば、革命の精神はかえって浮つき、希薄となることから、消失する結果になり、さらに続いて旧に復する。

広東は革命の策源地であるが、このために先に革命の後方ともなっている。それがゆえに上に述べた危機が真っ先に存在する。」

「革命時代的文学」（1927・4・8講演、『而已集』所収）では次のように言う。

「中国にはこの二種類の文学——旧制度に対する挽歌、新制度に対する謳歌——はありません。なぜなら中国革命はまだ成功していず、まさしく端境期であり、革命に忙しい時期であるからです。しかし旧文学は依然として多いです。新聞の文章はほとんどすべて旧式です。私が思いますに、これは中国革命が社会に対して大きな改変をしていない、守旧的な人に対して大きな影響を与えていないことを示しています。だから旧い人がなお超然としていることができるのです。広東の新聞紙が語る文学はすべて旧いもので、新しいものは少ない。これも広東の社会が革命の影響を受けていないことを証明しています。新しいものに対する謳歌がなく、旧いものに対する挽歌もない。広東は依然として十年前の広東です。こればかりではなく、さらに苦痛を訴え、不平を鳴らすこともない。ただ労働組合がデモに参加するのを見ます、しかしこれは政府が許可したものであり、圧迫があるために反抗するのではなく、上からの命令を受けた革命にすぎません。中国社会は改まっていません、だから懐旧する哀詞がなく、斬新な行進曲也没有。ただソビエト・ロシアにはすでにこの二種類の文学が生まれています。」（『革命時代的文学』、1927・4・8講演、『而已集』所収）

¹⁸ 『魯迅を語る——北支那の白話文学運動——』（山上正義、『新潮』第25巻第3号、1928・3）で、山上正義は、魯迅が広州に到着した1927年1月から約1ヶ月ほど後の言葉を次のように紹介する。（旧字体を新字体に改め、旧仮名遣いを新仮名遣いに改めた。）

「『広東の学生も青年も革命を遊戯化しています。余りに甘やかされ過ぎています。真摯に見るべきものなく、真剣さの感ずべきものありません。むしろ常に圧迫され、虐げられつつある北方の学生、青年の中にこそ真剣さがあり、真面目さが見られます。

広東には絶叫、有頂天はあっても悲哀がありません。思索と悲哀のないところに文学はありません、……』斯んな調子だった。」

¹⁹ 『魯迅年譜（増訂本）』第2巻（李何林主編、人民文学出版社、2000・9）による。

²⁰ この当時魯迅が監視されていたことは、「通信」（1927・9・3、『而已集』所収）で次のように言う。

「私はまたどうやら、ある団体が自ら正統だと思いこんで、思想を監督することを好んでいると感ずます。私も監督される列にあるようで、時に尋問式の訪問者に会うことがあり、しばしば彼らであろうと疑います。」

増田渉は「解説」（『魯迅選集』第7巻、岩波書店、1956・9・22）で言う。増田渉は、1931年当時、「魯迅」（林玉堂著、光落訳、『北新』第3巻第1期、1929・1・1）を読み、直接魯迅にスパイの件を尋ねたと言う。

「すると魯迅は言った。

『そんなこともありましたよ、実は彼らはスパイなんかなる資格もないバカですよ』

『学生ですか、そのスパイは？』

『学生です、だが何も知らないんです、どうせ反動派の手先になるやつだから、そんなも

んです。』」

21 「中国文学家对于英国智識階級及一般民衆宣言」（『洪水』第3巻第30期、1927・4・1）を指すと思われる。末尾の署名者に、「成仿吾、魯迅、王独清、何畏等」とある。

22 「魯迅を語る」（丸山昇、『ある中国特派員』、田畑書店、1997・6・15）は山上正義の「魯迅を語る——北支那の白話文学運動——」の記述について次のように指摘する。

「一言山上の思いこみを訂正しておく、彼は魯迅がクーデターを逃れて、身を潜めたかのように書いているが、前述のように魯迅がここに移ったのは3月29日であって、身を潜めたわけではない。彼の身にも危険はあったが、彼は4月15日の午後開かれた各科主任緊急会議で、逮捕学生の救援を主張、容れられずに帰ると、翌日から出講せず引きこもったものの、身をかくすことはしていない。」

23 「解説」（増田渉、『魯迅選集』第7巻、岩波書店、1956・9・22）は次のように魯迅の言葉を引用する。

「『国民党は有為な青年を陥穽に落としこんだ。初めは、共産党は機関車で国民党は列車だ、革命は共産党が国民党を引っぱることによって成功するのだといった、あるいは革命の恩人だというのでポロージン（当時、革命指導者としてソ連からきていた）の前で学生一同に最敬礼をさせたりした。だから青年は誰もが感激して共産党に入った。すると今度は突然、共産党なるが故に彼らを片端から殺した。この点は旧式の軍閥の方がまだ人がいい。彼らは最初から共産党を容れず最後までその主義を守った。彼らの主義が嫌なものだから寄りつかないと反抗するとかすればいい。だが国民党のとったやり方はまるでペテンだ。その殺し方がまたひどかった。たとえば殺すにしても脳天へ一発の弾丸を打てばそれで目的は達せられるはずなのに、刻み斬りだとか生き埋めだとか、親兄弟までも殺したりした。僕はそれ以来、人をだまして虐殺の材料にするような国民党はどうしてもいやだ。憎しみがこびりついてしまった。僕の学生をたくさん殺した。』」

24 後期魯迅の弱者に対する人道主義的な同情心は、「論秦理齋夫人事」（1934・5・24、筆名公汗、『花辺文学』）にうかがわれる。

また、人道主義に対する後期魯迅の思考の深化について、「魯迅翻訳のルナチャルスキー諸著作に関する覚え書——人道主義について」（拙稿、『現代の日本における魯迅研究』、秋吉收編、九州大学大学院言語文化研究院、2016・3・31、のちに『魯迅後期試探』〈名古屋外国語大学出版会、2016・10・20〉所収）で述べたことがある。

25 『魯迅と西洋近代文芸思潮論』（工藤貴正、汲古書院、2008・9・25）は第Ⅲ部第7章第1節の「三『小さなヨハネス』の『影』の投影」で、『小さなヨハネス』の最後の場面の問答形式と『鑄劍』（1927・4・3、『故事新編』）の「黒い男」と眉間尺の問答形式を比較し、「この同じような問答形式の表現内容を見ても、魯迅が『鑄劍』の執筆に際し、『小さなヨハネス』の表現内容やレトリックを念頭に置き、『黒い男』に『黒い人影』〔『小さなヨハネス』〕の象徴性を覆わせていたことが窺える。」とする。『小約翰』の最後の場面のヨハネスの選択は、魯迅に対して影響力の大きかったことがわかり、共感の大きかったことも、傍証としてここに窺われる。

26 大学の業務が忙しかったことについて、「在鐘楼上——夜記之二」（原載は、『語絲』第4巻第1期、1927・12・17、『三閑集』所収）で次のように言う。

「鐘楼の第2ヶ月日は、〈教務主任〉という紙の冠を載せていたときで、忙しい時期であっ

た。学校の大事は、恐らく追試と始業より過ぐるものはないであろうことは、他のすべての学校と同じである。そこで会議を開くことに同意し、時間表を組み、通知書を出し、題目を厳密に保管し、答案を配る、……そこでまた会議、議論、点数の計算、掲示発表。労働者の規則は、午後5時以降は仕事をしない。そこで一人の事務員が門番に手伝ってもらい、その日の夜3.3メートルあまりの長い掲示を貼る。しかし翌日の朝になると、すでに破り捨てられてしまい、そこでまた掲示を書く。それから議論がある。点数が多いか少ないかの議論、合格かどうかの議論、教員に私心があるかどうかの議論、革命的青年を優待する、優待の程度について、私はすでに優待したと言い、彼はまだ優待していないという議論、（中略）このように一日一日と過ぎていった。」